台大日本語文研究第 12 期
2006 年 12 月，頁 169-192
本文 2006-1027 收稿，2007-0117 通過刊登

台日大學生不滿表現之考察

吳岳樺*

摘　要

本研究爲探討台日雙方大學生有關不滿表現之策略，以台日雙方大學生爲調查對象，完成談話測試表（DCT）之測試。從調查結果得之，台日雙方大學生整體使用傾向皆以「直接型不滿表達」「理由說明的要求」「改善要求」等策略爲主。日本大學生在與對方關係爲不熟悉以及位於晚輩的情況下，即使感受到不滿，卻選用「不表達」的策略比率上明顯高於台灣大學生許多，爲本調查結果之特色。另外台灣大學生在不滿表現上之策略選擇不太受「親疏關係」「上下關係」之影響；而日本大學生在不滿表現上之策略選擇卻受到與對方的「親疏關係」「上下關係」之影響。

關鍵字：言語行動、不滿表現、不滿表現策略、談話完成測試表

* 靜宜大學日本語文學系助理教授

A Comparative Study of Complaints Expressed by Japanese and Taiwanese students

WU, Yueh-Hua*

Abstract

The purpose of this study is to investigate the manner of dissatisfaction used by Chinese native speakers in Taiwanese Universities, Japanese native speakers in Japanese Universities.

The following account results from this paper:

1) It is concluded that these two groups are similar in some strategies for dissatisfaction. Some strategies embrace “Express directly” “Demands of explanation” and “Press for reforms to be made”.
2) It is differences in the expression of dissatisfaction between Chinese speakers and Japanese speakers. Especially, the strategy of “no expression”.
3) Human relations can have a major effect on the expression of dissatisfaction in Japanese native speakers in Japanese Universities, but not in Chinese native speakers in Taiwanese Universities.

Key words: Linguistic Behavior, Dissatisfaction, Strategies for express dissatisfaction, Discourse Completion Test (DCT)

* Assist Professor of Department of Japanese Languages and Literatures, Providence University.

日台大学生における不満表明に関する一考察

呉岳樺*

要　旨

本研究では、日本人大学生と台湾人大学生を対象として、両者の不満表明ストラテジーにおける特徴を探るため、談話完成テストによる調査を行った。その結果、全体的使用傾向としては、両グループともに、「直接型の不満表明」「理由・説明の要求」「改善要求」などのストラテジーを多く使用していた。台湾人大学生に比べ、日本人大学生の方が「不満を表明しない」というストラテジーの使用頻度がより高いという特徴がある。また、台湾人大学生は不満表明において、親疎関係・上下関係にあまり影響されていないのに対して、日本人大学生に関しては相手との親疎関係・上下関係が不満表明に重要な変数として働くことが明らかになった。

キーワード：言語行動、不満表明、不満表明ストラテジー、談話完成テスト（DCT）

* 静宜大学日本語文学系助理教授

日台大学生における不満表明に関する一考察

呉岳樺

一、はじめに

近年、言語行動の研究において研究対象は、単一の言語に関する分析から、言語間の比較のレベルまで広がりを見せている。中でも、日中両言語における比較研究は数多く行われてきたが、研究テーマが限られている状況である。台湾人と日本人が接触しコミュニケーションをとる機会は増えており、摩擦や誤解が生じるということをよく耳にするようになった。そのような摩擦や誤解を防ぐために、それぞれの社会における言語行動のパターンの違いを明らかにし、比較対照の立場から考察する必要がある。本稿では、これまであまり焦点を当てられることのなかった日本人と台湾人のコミュニケーション場面、特に不満表明という場面に焦点を当て、日本人大学生と台湾人大学生の不満表明ストラテジーを究明したい。具体的には、次の二点を明らかにすることを目的とする。

(1)日本人大学生、台湾人大学生を対象とし、各場面における不満表明ストラテジーの使用傾向を比較することにより、両言語の不満表明ストラテジーに、いかなる共通点、相違点が見られるか。

(2)日台のデータにおいて、「親疎関係」と「上下関係」が不満表明にどのように影響を与えているか。

この二点について、日本人大学生と台湾人大学生の不満表明ストラテジーを分析し、それぞれの特徴を検討していく。

二、先行研究及び本研究の研究法

（一）先行研究

言語行動の対照研究は、この 2, 30 年の間の語用論研究の発達に伴い急速に増えてきた。日中両言語における言語行動の対照研究では、「敬語」「依頼」「断り」「あいさつ」「謝罪」などが中

心であったが、「不満表明」などのような、発話することによって即座に対人関係の均衡を崩す恐れのある言語行動を取り上げた対照研究はまだ少ない。これまでに行われた不満表明という言語行動についての対照研究には、初鹿野他（1996）、藤森（1997）、朴（2000）、李（2004）、洪（2006）などがある。

初鹿野他（1996）においては、日本語母語話者と日本語学習者（多国籍）との比較研究が行われているが、「不満表明ストラテジー」の使用において、日本語学習者の方が日本語母語話者に比べ、より間接的なストラテジー表明を多用する傾向がある、との結果を得ている。藤森（1997）では、「日本人母語話者は好ましくない場面を状態という観点から捉え、その状態を同定するというストラテジーの使用頻度が高い。一方、英語母語話者の場合は動作主指向型の表現形式によって、好ましくない状態を暗示するストラテジーを多用する傾向が日本人母語話者より強いと言える」との結果を出している。朴（2000）と李（2004）では、日本語母語話者・韓国人母語話者・韓国人日本語学習者の比較が行われている。朴（2000）は、韓国人日本語学習者の方が日本語母語話者に比べ、より間接的な不満表明をすると指摘している。李（2004）は、日本語母語話者に比べ、韓国語母語話者の方がより FT 度[1]の高いストラテジーを使用し、日本語母語話者に比べ、韓国人日本語学習者の方がより FT 度の高いストラテジーを用いると指摘している。洪（2006）は、不満表明のストラテジーとして日本人は間接型か忍耐型、韓国人は直接型のストラテジーをとる人が相対的に多いとしている。また、不満表明のストラテジーの使い分けの基準として韓国人は相手との年齢による上下関係、日本人は社会的役割や親疎関係を主に用いるが、これは両言語の敬語体系の違いと深く関係している、との結果を得ている。

---

[1] Brown and Levinson（1987）では、「不満表明」には話し手と相手のフェイスが関わっているが、特に相手のフェイスを脅かす行為（Face Threatening Acts）であるとされている。

（二）本研究の研究法

外国人と日本人とが円滑なコミュニケーションをするために、外国人の行動形式と日本人の行動形式とを比較し、両者の相違点を見出そうという研究が近年日本で多くなされてきた。特に、この 20 年の間、言語行動に関する対照研究が注目されている。それらは、異文化における言語行動の相違を研究する分野（異文化間語用論）と第 2 言語学習者の言語行動を研究する分野（中間言語語用論）に分けられる。本稿の研究は日本と台湾の比較研究なので前者の研究領域に属する。先行研究から分かるように、不満表明に関する比較研究はほとんど日韓比較に集中しているのが現状である。管見の限りでは、日台の不満表明に関する比較研究はほとんどなされていない。したがって、本研究では日本人大学生と台湾人大学生の不満表明ストラテジーの使用傾向に焦点を当て、考察を行う。

これまでの先行研究では、各々の地域で一つの都市からのみデータを集めることが多かったため、被験者数が少ないだけでなく、標本誤差が生じてしまう可能性が高い。データ収集としてはできる限り無作為抽出に近い方法が望ましいが、異文化・国際比較を行う場合は非常に困難であるといわざるを得ない。本研究では、誤差を最小限にして、各々の地域から三大都市圏のデータを集めることにする。なお、言語行動の調査においては、いろいろな要因が回答に影響を与える。不満表明の場面設定という例を挙げると、年齢・性別・上下関係などによる社会的要因、自分と相手との親疎関係による心理的要因、相手のフェイスを脅かす度合い、不満を感じた頻度、修復の可能性、義務の有無などの要因が考えられる。一つの場面設定では全部の要素を網羅することが難しいので、本研究では「親疎関係」と「上下関係」という２つの要素に絞り、研究を進めていきたい。

三、調査

（一）データの収集方法

言語研究の対象は、言語の体系・構造といった従来の枠を越え、言語意識、言語行動、言語習得など広範囲に及ぶようになり、方法論的にも多種多様なアプローチが試みられている。研究の材料として利用するデータの収集方法の観点から見ると、「文献などの記録から得るタイプ」と「直接、調査対象者から得るタイプ」の二つに大きく分けられる。言語行動の調査法は後者のタイプに属する。つまり、生きた人間を対象にデータ収集を行う調査方法である。荻野（2003）[2]は言語行動の調査法を「観察法」「実験法」「質問法」に分類している。荻野の分類の要点は以下のようにまとめられる。

１．観察法

特徴としては、ありのままの自然なデータが得られる。しかし、観察の対象者に気付かれずに観察できるかどうか、また観察者がいることが人々の言語行動に影響してしまう、などの問題がある。盗聴マイクや隠しビデオを使えば、問題はなくなるかもしれないが、倫理的な問題がでてくる。なお、観察法では条件がコントロールできないというデメリットもある。

２．実験法

実験法では、言語行動の諸条件を研究者がコントロールすることができるので、欲しいデータを直接得ることができる。実験法を分類すると、被験者に実験されている意識がない「真性行動実験」と、被験者が実験されていることを知っている「疑似行動実験」とがある。擬似行動実験はロールプレイともいう。この調査法では、やはり自然談話とは少し違ってしまう。実験法には大量の実験が不可能であるという欠点がある。

３．質問法

特徴としては、手軽に多数を相手にできるし、回答者の多様性を

[2] 荻野綱男（2003）『言語行動』朝倉書店、第 11 章参照。

抽出することができる。質問法の調査では、回答者との接触のしかたで大きく分けて 3 種類のスタイルがある。それは「面接法」「配布回収法」「通信法」である。質問法の最大の問題点は、質問に対する回答は、あくまで意識であって、実際の行動ではないということである。つまり、意識と実際の行動のずれがあることである。

上述した分類法から分かるように、観察法と実験法には、それぞれ「条件のコントロールができない」と「被験者への倫理的問題」があるので、これまでの研究では、「質問法」が中心であった。特に談話完成テスト（Discourse Completion Test：以下 DCT）[3]による調査では多数の被験者から効率的に資料収集するには有効であると考えられる。この分野の先行研究例として必ず引用される Blum-Kulka, House and Kasper(1989)の異文化間比較スピーチアクト調査プロジェクトである。この研究で用いられた談話完成テストは、その後の異文化間語用論研究で頻繁に使用されるようになった。しかし、DCT という調査法の最大の問題点は、質問に対する回答があくまで意識であって、実際の行動ではないということである。その点について、Rintell and Mitchell (1989)[4]と Yamashita (1996)[5]との先行研究から分かるように、DCT では信頼性も有効性も確認されている。大量のデータの収集と様々な場面設定が組み込めることから、本稿の調査では DCT を採用することにした。

（二）調査の概要

本稿では日本と台湾の大学生を対象に大学で起こりうる不満表明のストラテジーに関する調査を行い、両言語社会間の相違点を考察

---

[3] DCT とは相手との社会的距離関係や場面状況が明記されている設問用紙を用いて被験者の反応を筆記回答させる形式の調査方法である。

[4] Rintell and Mitchell(1989)には、学習者は DCT よりロールプレイの発話の方が長くなるが、ネイティブスピーカーは両者のデータに顕著な差が認められなかったとある。

[5] Yamashita（1996）は 6 種類（自己評価・LL テスト・オープン DCT・ロールプレイ・ロールプレイの自己評価・選択式 DCT）のデータ収集の方法を統計的に比較検討した研究である。分析結果から、選択式 DCT では信頼性と有効性が確認できなかったが、他の 5 種類の収集方法では信頼性も有効性も確認できたという。

する。上述した DCT 法によって、次のような被験者を対象に調査を行った。調査は、2006 年 5 月から 6 月にかけて、日本と台湾において行われた。日本は、東京（桜美林大学）、名古屋（名古屋大学）、大阪（関西大学）、台湾は台北（政治大学）、台中（静宜大学）、高雄（高雄第一科技大学）のそれぞれ三地域で行った。調査対象者は、有意選択方式（convenience sampling）で選んだ男女大学生 288 人である。具体的には、日本人 157 人（男子 59 人、女子 98 人）、台湾人 131 人（男子 40 人、女子 91 人）である[6]。本研究では被験者を日本の大学生と台湾の大学生に限定し、日本語母語話者（以下、JJ）と台湾人中国語話者（以下、TC）に対して、16 場面からなる談話完成テストを実施した。

調査内容に関しては、話し手と聞き手の間に「親疎関係」と「上下関係」との組み合わせに配慮した場面を考えた。2 つの組み合わせは表 1 のようになる。それぞれの組み合わせで、実際の大学生活で遭遇する可能性が高いと思われる 16 通りの場面を設定し、不満をどのように表明するかを談話完成テストによって調査した。16 場面からなる談話完成テストの設問の概要は表 2 に示す。

表 1　DCT の内容と不満表明の相手の内訳

場面	状況	相手	親疎関係	上下関係
1	成績の評価	先生	親	上
2	成績の評価	先生	疎	上
3	ゼミ発表	先輩	親	上
4	ゼミ発表	後輩	親	下
5	奨学金	職員	親	上
6	奨学金	職員	疎	上

[6] 各大学での調査人数は、桜美林大学（男性 10；女性 42）、名古屋大学（男性 18；女性 22）、関西大学（男性 31；女性 34）、政治大学（男性 5；女性 32）、静宜大学（男性 13；女性 41）、高雄第一科技大学（男性 22；女性 18）という内訳である。

7	試験勉強	後輩	親	下
8	試験勉強	先輩	疎	上
9	食堂	後輩	疎	下
10	食堂	後輩	疎	下
11	部活動	先輩	親	上
12	部活動	後輩	親	下
13	図書館	職員	疎	上
14	図書館	後輩	疎	下
15	資料提出	後輩	親	下
16	送別会	後輩	疎	下

表 2　DCT の内容の概要　（S は被験者）

場面	談話完成テスト設問の概要
01	S の先生のつけた成績の評価（期末）が思ったより低かった。S は先生ととても親しい。
02	同上。S は先生とあまり親しくない。
03	ゼミの共同発表の日に、S の先輩が自分の担当した部分をやってこなかった。
04	同上。S の後輩が自分の担当した部分をやってこなかった。
05	S は事務室のスタッフに奨学金の申込書を提出した。しかし、そのスタッフは S の書類をなくしてしまった。S はそのスタッフととても親しい。
06	同上。S はそのスタッフと初対面である。
07	S は試験勉強中。ルームメートの後輩が音楽を聴いていて、とてもうるさい。
08	同上。隣の部屋の先輩たちが大きな声で騒いでいる。隣の先輩たちとは、日頃あまり付き合いはない。
09	S は学校の食堂で昼ご飯を食べようとしている。S が長い

	列に並んでいる。突然、見知らぬ後輩が S の前に割り込んできた。
10	S は食堂で定食を注文したが、30 分も過ぎたが、定食はまだ出てこない。注文を受けたスタッフは学校の食堂でアルバイトしている S の知らない後輩である。
11	S はサークルの部員である。サークルの会議のとき、部長はいつも遅刻している。S は 30 分以上も待たされた。その部長は S の先輩である。
12	同上。その部長は S の後輩である。
13	S は図書館から DVD を一枚借りた。返却のとき、DVD に傷がついていたので、スタッフに弁償を求められた。しかし、借りる前に DVD に傷があったことに S は気づいていた。
14	S は図書館に本を返却に行った。スタッフはパソコンの入力を間違えて、「貸出し中」という状態にしてしまった。一ヵ月後、図書館から罰金の支払いの催促が来た。そのスタッフは図書館でアルバイトしている S の大学の下級生である。S はその人と知り合いではない。
15	S は親しい友人にある大切な資料を事務室の職員に渡すようお願いした。その友人は忙しくて、その大切な資料を提出することを忘れてしまった。その友人は S ととても親しい後輩である。
16	S は卒業を間近にひかえた四年生である。毎年、S のサークルの下級生が卒業生のために、送別会を行っている。しかし、今年は例年と違って、後輩たちが送別会を開く予定はない。

四、調査結果の考察と分析

（一）不満表明ストラテジーの分類

調査結果を分析する前に、まず「不満」という用語の定義について述べたい。本研究では、藤森（1997）の解釈にならい、ある種の行動期待や当然とみなされる文化規範に反するような状況を好ましくないと感じることを「不満」と定義する。そして、不満の状況やその状況を引き起こした相手の行動や発話への反応として表出する発話行為を「不満表明行為」と呼ぶことにする。なお、初鹿野他（1996）の解釈にならい、好ましくない状況が H（聞き手）によって引き起こされたことを H に伝えようとする言語表現ストラテジーを「不満表明ストラテジー」と呼ぶことにする。本稿では、回答者の答えに現れたものを分析し、考察の便宜を図るために不満表明のストラテジーを表 3 のように分類した。以下に、本研究で用いる不満表明ストラテジーと回答の実例を提示する。

表 3　不満表明ストラテジーの分類

ストラテジー①不満を表明しない

解釈：何も言わない。相手の行動に関して一切言及しない。

実例：（場面２）先生がつけた成績の評価は期待より低かった。

回答：何も言わない。

ストラテジー②直接型の不満表明

解釈：相手によって引き起こされた好ましくない行為を直接的に言及する。

実例：（場面 5）事務室の職員は奨学金の書類をなくしてしまった。

回答：確かに出したから、そちらのミスですね。責任とってください。

ストラテジー③間接型の不満表明

解釈：相手によって引き起こされた好ましくない行為を直接的に述べるのではなく、それに関連した発言をすることによって気付かせる。

実例：（場面 9）見知らぬ後輩があなたの前に割り込んできた。
回答：すみませんが、皆並んでるんですけど。

ストラテジー④理由・説明の要求

解釈：不満な状況が生じた理由や状況の説明を相手に聞いたり、確認を求めたりする。
実例：（場面 4）ゼミ発表の日に後輩が担当の部分をやってこなかった。
回答：なんでやってこなかったの！

ストラテジー⑤改善要求

解釈：相手に不満な状況を変える行為を行うよう要求する。また、同じ行動を二度としないように要求する。
実例：（場面 7）勉強中。ルームメートが寝室で音楽を聞いている。
回答：ちょっと、ボリュームを下げていただけますか

ストラテジー⑥代償要求

解釈：不満な状況を引き起こした相手に代償を要求する。
実例：（場面 5）事務室の職員は奨学金の書類をなくしてしまった。
回答：晩御飯、おごってくれよ。

ストラテジー⑦警告・脅かし

解釈：相手に警告を発したり、脅かしたりする。
実例：（場面 12）部長の後輩は会議に遅刻した
回答：今度また遅刻したら、帰るよ。

ストラテジー⑧非難・感情表出

解釈：相手を非難したり、罵りの言葉で相手を攻撃したりする。
実例：（場面 4）ゼミ発表の日に後輩が担当の部分をやってこなかった。
回答：ふざけんじゃねえよ。

ストラテジー⑨許容・黙認

解釈：相手の過失を受け入れたり、許したりする。
実例：（場面 3）ゼミ発表の日に先輩が担当の部分をやってこなかった
回答：気にしないでください。何とかやりますので、大丈夫です。

（二）全体的使用傾向

今回の調査は 288 人（日本人大学生 157 人、台湾人大学生 131 人）を対象としている。回収したすべての調査票（16 場面）をチェックしてから、回答者のミスや不完全な部分が見つかった回答は、無効回答として無条件に統計の対象から除外した。JJ のストラテジー使用総数は 2442、TC のストラテジー使用総数は 2021 で、全使用総数（JJ＋TC）は 4463 であった。JJ 及び TC の全使用総数に対する各ストラテジー使用数の使用比率（%）のうち、⑤改善要求、④理由・説明の要求、②直接型の不満表明、というストラテジーが全体使用の 63.2%を占めている。その内訳は「表 4」の通りである。

表 4　JJ と TC のストラテジー使用率

	台　湾	日　本	総　数	比　率
ストラテジー①	99 (4.9%)	551 (22.6%)	650	14.6%
ストラテジー②	362 (17.9%)	419 (17.2%)	781	17.5%
ストラテジー③	54 (2.7%)	103 (4.2%)	157	3.5%
ストラテジー④	441 (21.8%)	455 (18.6%)	896	20.0%
ストラテジー⑤	547 (27.1%)	601 (24.6%)	1148	25.7%
ストラテジー⑥	22 (1.1%)	11 (0.4%)	33	0.08%
ストラテジー⑦	29 (1.4%)	12 (0.5%)	41	0.09%
ストラテジー⑧	140 (6.9%)	34 (1.4%)	174	3.9%
ストラテジー⑨	327 (16.2%)	256 (10.5%)	583	13.1%
合　　計	2021	2442	4463	100%

図 1 にみられるように、全使用総数に対する各ストラテジー使用数の使用割合のうち、ストラテジー⑤「改善要求」（25.7%）とストラテジー④「理由・説明の要求」（20%）が全体使用の 45%を占めている。全体的使用傾向としては、JJ は「改善要求（24.6%）」「不満を表明しない（22.6%）」「理由・説明の要求（18.6%）」に集中しているのに対して、TC は「改善要求（27.1%）」「理由・説明の要求（21.8%）」「直接型の不満表明（17.9%）」に集中している。特に JJ はストラテジー①「不満を表明しない」の使用が TC よりも多く（JJ は 22.6%に対して TC は 4.9%）、JJ の特徴と言える。一方、「非難・感情表出」「許容・黙認」などのストラテジーを、TC の方（6.9%、16.2%）が JJ（1.4%、10.5%）より少なく用いる傾向がある。

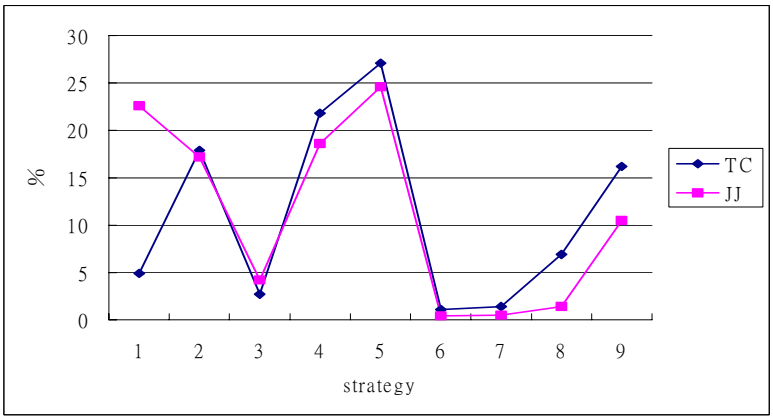


図 1

（三）場面別使用傾向

表 5 は、場面別にストラテジーの使用傾向を示したものである。各場面ごとに日台大学生の使用傾向が見られる。ここでは、ストラテジーの異同に着目して、すべての場面を取り上げて使用傾向を考察する。

表 5　JJ と TC の場面別ストラテジー使用率

	Str①	Str②	Str③	Str④	Str⑤	Str⑥	Str⑦	Str⑧	Str⑨	計
場面 01　JJ	18%	2%	10%	57%	6%	0%	0%	1%	6%	100%
場面 01　TC	5%	9%	5%	66%	2%	0%	0%	4%	9%	
場面 02　JJ	65%	1%	1%	28%	1%	0%	0%	1%	3%	100%
場面 02　TC	12%	7%	0%	63%	0%	0%	0%	8%	11%	
場面 03　JJ	21%	13%	1%	22%	31%	1%	0%	1%	11%	100%
場面 03　TC	5%	10%	1%	23%	27%	0%	0%	9%	25%	
場面 04　JJ	8%	8%	0%	31%	38%	1%	2%	3%	10%	100%
場面 04　TC	2%	19%	0%	26%	23%	0%	3%	8%	19%	
場面 05　JJ	4%	11%	0%	7%	37%	1%	1%	1%	38%	100%
場面 05　TC	1%	2%	0%	13%	21%	8%	1%	5%	50%	
場面 06　JJ	7%	11%	1%	6%	37%	1%	1%	2%	34%	100%
場面 06　TC	2%	2%	0%	9%	27%	3%	2%	9%	47%	
場面 07　JJ	8%	5%	5%	1%	81%	0%	0%	1%	0%	100%
場面 07　TC	3%	3%	2%	0%	88%	0%	0%	2%	2%	
場面 08　JJ	68%	1%	1%	7%	23%	0%	0%	0%	0%	100%
場面 08　TC	8%	13%	2%	0%	70%	0%	1%	5%	1%	
場面 09　JJ	44%	7%	19%	1%	24%	0%	1%	4%	0%	100%
場面 09　TC	10%	8%	8%	2%	56%	0%	0%	11%	5%	
場面 10　JJ	5%	6%	0%	78%	8%	0%	0%	1%	1%	100%
場面 10　TC	1%	6%	2%	70%	19%	0%	0%	1%	2%	
場面 11　JJ	28%	23%	7%	8%	29%	0%	1%	3%	1%	100%
場面 11　TC	9%	16%	9%	7%	39%	2%	5%	11%	3%	
場面 12　JJ	12%	25%	8%	12%	37%	1%	2%	3%	1%	100%
場面 12　TC	7%	18%	9%	8%	37%	2%	8%	11%	1%	
場面 13　JJ	0%	95%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	3%	100%
場面 13　TC	2%	88%	0%	6%	1%	0%	0%	2%	2%	

場面 14　JJ	7%	58%	1%	9%	12%	2%	0%	1%	9%	100%
場面 14　TC	1%	60%	0%	18%	7%	3%	1%	6%	3%	
場面 15　JJ	14 %	11%	5%	3%	14%	0%	0%	1%	52%	100%
場面 15　TC	5%	22%	1%	7%	11%	0%	1%	6%	48%	
場面 16　JJ	53%	1%	8%	23%	11%	0%	1%	1%	3%	100%
場面 16　TC	5%	4%	5%	32%	6%	0%	2%	15%	31%	

図 1 と図 2（場面 1 と 2）は成績に不満があった時、先生に何と言うかという質問に対する結果を示したものである。統計結果から分かるように、JJ は場面 1 と場面 2 において、それぞれストラテジー④「理由・説明の要求」（57%）とストラテジー①「不満を表明しない」（65%）を多く用いているのに対して、TC は両場面ともストラテジー④「理由・説明の要求」（66%、63%）の使用が多いという違いが見られた。これをみると TC は先生と親しいかどうかに関係なく、「老師、請問成績的評分標準為何？」（先生、どういった基準で成績をつけたのですか）」のような「理由・説明の要求」というストラテジーをとる率が最も高くなっている。一方、JJ は親しい先生なら、TC と同じく「理由・説明の要求」をとる率が高くなっているが、親しくない先生なら、「理由・説明の要求」の比率はかなり減り、その代わりに「不満を表明しない」の比率が増えている。

図 3（場面 3）は共同発表の日に、ゼミの人が自分の担当した部分をやってこなかった時、相手に何と言うかという質問に対する結果を示したものである。場面 3 と 4 において、JJ と TC はストラテジー④「理由・説明の要求」と⑤「改善要求」を多用する傾向があるが、場面 3 では JJ が TC よりストラテジー①「不満を表明しない」（21%）を多く用いるのが特徴である。

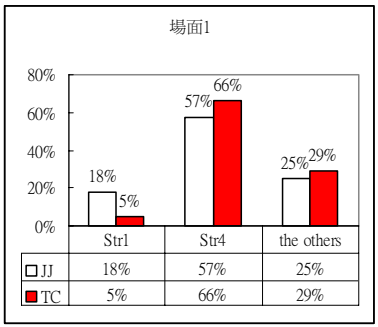


図 1

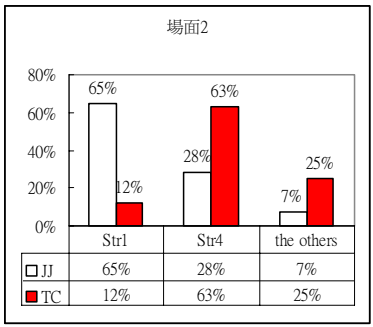


図 2

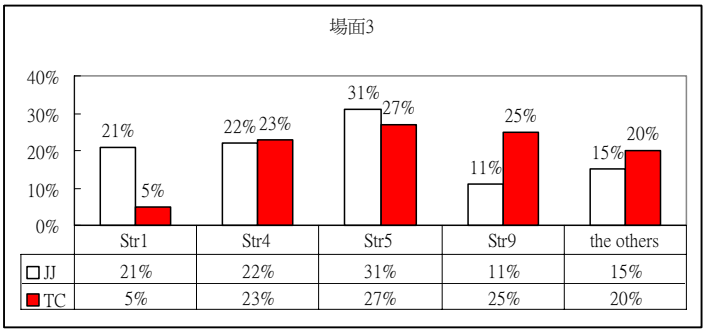


図 3

場面 5 と 6 は奨学金の申込書をなくされた場面に関する質問である。JJ と TC が最も多く使用したストラテジーは⑤「改善要求」と⑨「許容・黙認」であるが、JJ の割合は TC ほどではない。

図 4 と図 5 は試験勉強中、隣人がうるさい場面に関する結果を示したものである。場面 7 と 8 の統計をみると、TC は音楽を聞いている相手（先輩か後輩）によってストラテジーがあまり変わらないが、JJ は相手によって不満表明のストラテジーがずいぶん変化している。つまり、TC の場合は先輩後輩に関係なく「ボリュームを下げていただけますか」「ちょっと静かにしてくれませんか」のような「改善要求」というストラテジーを多用する。その一方、JJ は相手が後輩の場合、「改善要求」をとる率は 81%にのぼるのに対して、相手が先輩になると、「改善要求」の率は 23%に減り、

「不満を表明しない」というストラテジーをとる率は 68%に増える。

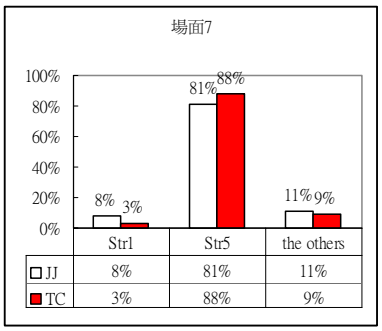


図 4

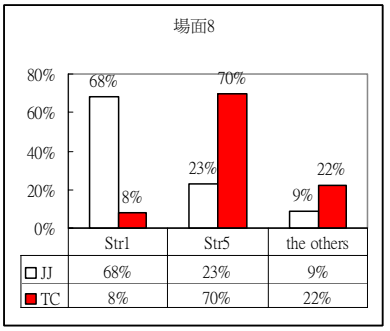
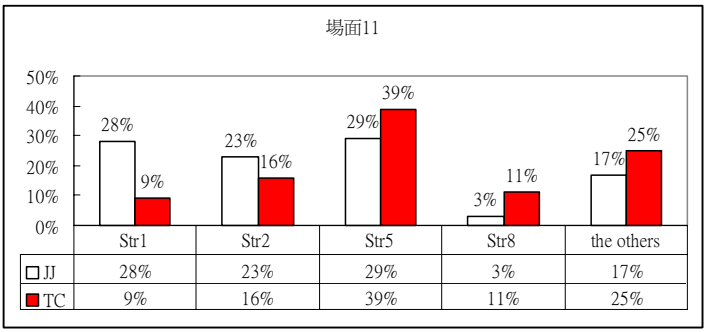


図 5

場面 9「食堂で見知らぬ後輩が自分の前に割り込んできた」では、JJ が多用しているのはストラテジー①「不満を表明しない」（44%）と⑤「改善要求」（24%）であり、TC が多用しているのはストラテジー⑤「改善要求」（56%）である。

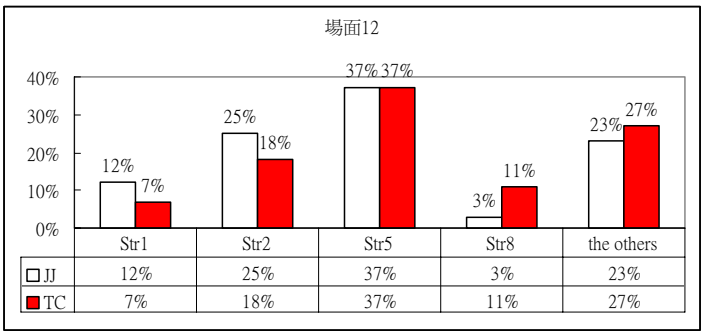
場面 10 の「食堂で料理を注文したが、30 分も待たされた」場面については、ストラテジー④「理由・説明の要求」がほとんどであり、JJ と TC に目立った差異は見られなかった。これは「不満表明」という発話行為の目的を考えると当然の結果であろう。

図 6 と図 7（場面 11 と 12）はサークルの会議のとき、部長が遅刻した場面に対する結果を示したものである。場面 11 と 12 では、JJ がストラテジー⑤、②、①を多用するのに対して、TC がストラテジー⑤、②、⑧を多く使っている。データをみると、両者とも 60%近くの人が遅れてきた部長にストラテジー⑤「改善要求」と②「直接型の不満表明」をとっているが、JJ は場面 11 において、28%の人が「不満を表明しない」というストラテジー①をとっているのが特徴である。一方、ストラテジー⑧「非難・感情表出」の使用が JJ はわずかであるのに対して、TC では比較的多く用いられている。



	Str1	Str2	Str5	Str8	the others
JJ	28%	23%	29%	3%	17%
TC	9%	16%	39%	11%	25%

図 6



	Str1	Str2	Str5	Str8	the others
JJ	12%	25%	37%	3%	23%
TC	7%	18%	37%	11%	27%

図 7

場面 13 と 14 では、ストラテジー②「直接型の不満表明」が多用され、場面 15 では、ストラテジー⑨がほとんどであり、JJ と TC に目立った差異は見られなかった。

場面 16 で、JJ が最も多く使用したストラテジーは①「不満を表明しない」（53％）であるのに対し、TC はストラテジー④「理由・説明の要求」（32％）と⑨「許容・黙認」（31％）の使用が多い。

以上の結果をまとめると、日本人大学生と台湾人大学生には以下のような特徴が見られた。

1、日本人大学生は不満に感じてもそれを言語で表明しないというストラテジーを台湾人大学生よりも多く用いる傾向がある。日本人大学生のストラテジー①「不満を表明しない」の使用傾向

は次のように整理できる。

（1）使用頻度が 60%以上

統計の結果から分かるように、「不満を表明しない」というストラテジーをとる率が高くなっているのは場面 2（65%）と場面 8（68%）である。上下関係と親疎関係からみると、いずれも「疎」の関係と先生や先輩のような「上」の関係である。

（2）使用頻度が 40%から 59%

場面 9（44%）と場面 16（53%）は、いずれも「疎」の関係であるが、相手が後輩のような「下」の場合である。たとえ相手が年下でも、疎の関係が成立すると、「不満を表明しない」というストラテジーが多用される傾向が見られる。

（3）使用頻度が 20%から 39%

場面 3（21%）と場面 11（28%）は、いずれも「親しい関係」であるが、両場面とも先輩や部長のような「上の関係」である。「不満を表明しない」の使用率は 2、30%に減る。

2、日本人大学生の不満表明には相手との親疎関係・上下関係が影響を与えていることが分かった。なお、「不満を表明しない」というストラテジーの使用頻度からみると、相手との関係が「疎・上」「疎・下」「親・上」という順であった。つまり、「不満を表明しない」というストラテジーの使用には日本人大学生は相手との上下関係よりも親疎関係を重要視する傾向があると考えられる。

3、台湾人大学生は不満表明において（例：場面 1 と 2、場面 5 と 6）親疎関係にあまり影響されていないのに対して、日本人大学生には相手との親しさが（例：場面 1 と 2、場面 7 と 8）重要な変数として働くことが分かった。

4、台湾人大学生は不満表明において（例：場面 3 と 4、場面 11

と 12）上下関係にあまり影響されていないのに対して、日本人大学生には相手との上下関係が（例：場面 3 と 4、場面 11 と 12）影響を与えていることが示唆された。

五、結論

本研究では日本人大学生と台湾人大学生の「不満表明」を取り上げ、両者の場面別不満表明ストラテジーを比較した。その結果、各場面における両者の不満表明ストラテジーの異同が明らかになった。本稿の結論は次のようにまとめられる。

（一）全体的使用傾向としては、両グループ（日台）ともに、ストラテジー②「直接型の不満表明」、ストラテジー④「理由・説明の要求」、ストラテジー⑤「改善要求」を多く使用している点が共通している。特に日本人大学生はストラテジー①「不満を表明しない」の使用が台湾人大学生よりも多く、日本人大学生の特徴と言える。日本人大学生は不満に感じてもそれを言語で表明しないというストラテジーを台湾人大学生よりも多く用いている傾向があり、それは日本人大学生の方が、相手との親疎関係・上下関係が不満表明の選択に影響を与えていたからである。

（二）全体的に台湾人大学生は不満表明において、親疎関係・上下関係にあまり影響されていないのに対して、日本人大学生には相手との親疎関係・上下関係が重要な変数として働くことが分かった。不満表明において日本人大学生は台湾人大学生より対人関係維持をより重視していることが分かった。

現在、国際化社会に適応するために、異文化の調整能力の養成が求められている。本研究では日台大学生の不満表明ストラテジーの全体的使用傾向の分析にとどまっている。筆者の力不足と紙幅の関係で、言及できなかった問題も少なくない。今後、日台大学生がどういう場面でどのようなストラテジーを用いているのかなどについて考察を進めていきたい。なお、相手との親疎関係・上下関係のほかに、相手の性別の要因、不満を感じた頻度、被害の度合い、修復

の可能性などの問題が両グループの不満表明ストラテジーの選択に与える影響についても考察を進めていきたい。本研究では DCT という調査法を用いて考察を行ったが、これからロールプレイという実験法による調査を加えて調査を進めていくことを今後の課題としたい。

参考文献

Brown, P. and Levinson, s. (1987) *Politeness: Some university in language usage*. Cambridge University Press.

Rintell, E. M. and Mitchell C. J. (1989) Studying requests and apologies: An inquiry into method. In S. Blum-Kulka, J. House, and G. Kasper (Eds.), *Cross-Cultural Pragmatics: Request and Apologies*, 248-272. Norwood, NJ: Ablex.

Yamashita, S. (1996). *Six measures of JSL pragmatics*. Technical Report 14, Honolulu: University of Hawaii, Second Language Teaching and Curriculum Center.

初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子（1996）「不満表明ストラテジーの使用傾向――日本語母語話者と日本語学習者の比較――」『日語教育 88：128-139』日本語教育学会

藤森弘子（1997）「不満表明ストラテジーの日英比較――談話完成テスト方の調査結果をもとに――」『言語と文化の対話：243-257』英宝社

朴承圓（2000）「『不満表明表現』使用に関する研究――日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者の比較」『言語科学論集 4：51-62』東北大学文学部言語科学専攻

窪田富男（2001）「言語行動の対照研究を」『日本語教育 108：5-13』号日本語教育学会

飛田良文（2001）『異文化接触論』おうふう

林知己夫（2002）『社会調査ハンドブック』朝倉書店

荻野綱男（2003）『言語行動』朝倉日本語講座 9　朝倉書店

ガブリエル・キャスパー（2004）「語用論研究におけるデータ収集」『異文化理解の語用論――理論と実践――』研究社

田中ゆかり（2004）「質問して何がわかるか――質問調査法入門――」『現代の質問調査法』『日本語学 23〔8〕6 月臨時増刊號：6～18』

李善姫（2004）「韓国人日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育 123：27～36』号日本語教育学会

洪珉杓（2006）「日韓両国人の言語行動の違い――不満表明のストラテジーに関する日韓比較――」『日本語学 25〔9〕8 月号：86～95』明治書院